
月面基地ナニワ

寝村萬寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月面基地ナニワ

【Nコード】

N3912D

【作者名】

寝村萬寺

【あらすじ】

月に基地が出来ました。そんな時代の風俗レポーターが月の風俗事情をレポートしに行ったらなんか変なことになってきた！作者も先が読めないストーリーの結末やいかに！！

月面基地ナニワは今日も夜です（前書き）

連載を書いてみようと思ってジャンルを考えるとなんとなくSFになりました。週一ぐらいで続編書いていければ良いなあ。一話は内容が全くないです。もっと頑張ります。

月面基地ナニワは今日も夜です

今日もずっと夜だったように思う。

月面基地ナニワは人口3万、男女比10対1の日本の飛び地である。ご存知だろうが世界で唯一の地球外都市であり、唯一の月面基地である。月面上の資源採掘を目的とした営利施設であり、民間企業「なにわエネルギー工業」が建設、維持、運営を行っている。

ナニワでは主に資源採掘を行っているが、採掘している資源はヘリウムスリーである。月面基地でヘリウムスリーを取り出し、地球に輸送している。

ナニワは日本の飛び地であり、フォンブラウン県ナニワ市という住所が与えられている。フォンブラウンの名前を使ってしまう辺りが官僚らしく安直でなにやら愛着が湧く。月面基地ナニワに来るには種子島宇宙空港から人工衛星「トウモロー」行きに乗り、衛星で乗り換え週一便出ているナニワへの直行便に乗り、3日で月に到着する。

さて、つまらない地理的なお勉強はこの辺にして、本冊子「月の夜遊び」の主題に入っていこう。

文頭にも書いたが月面基地ナニワは常に夜である。月面基地は朝昼は6時から18時まで、夜は18時から翌日の6時と決まっている。しかし体感としてはまるつきり24時間夜である。朝には全館のライトが点灯し、公園などの窓の液晶画面には日光が映される。夜になると全館を薄暗くし、モニタには夜空と地球が映し出される。しかし、体感としてはどう考えても夜なのである。室内にいて電気を切ったり点けたりしている状態に近いかもしれない。しかし、常に夜であるように感じるのはそれだけが原因ではない。

月に於ける重力は地球の6分の1、長期の低重力下生活は人体に

多大な影響を与える。そのため月面基地ナニワでの最長滞在期間は4年と決まっており、単身赴任の男性がほとんどである。家族での生活者はほぼ皆無だ。成人男性の性欲を処理するために、また家族と会いたいという渴きを潤すためにナニワは大規模な歓楽街が用意されている。ナニワの住人の10分の1の女性は多くがこの歓楽街の女性従業員、浴場従事者である。しかも歓楽街の多くの店が24時間営業であり街には若い女を求めたおっさんや一杯呑んで出来上がったおっさんが昼夜を問わずフラフラしている。

「月で女を買うと安い」という話を聞いたことはないだろうか。ナニワにおいて風俗業はすべてなにわエネルギー工業社が経営しているため、支払われる給与はほとんど女性の手元にのこりその結果地球上の風俗より随分と安くなるのだ。

地球の嫁さんから開放されて、しかも格安な大規模な歓楽街。まるで男性の天国のような所であるが、ナニワで女遊びをするためには非常に多くの試練を超えなければならない。まず、宇宙に感染症を持ち込まないための細菌検査にすべてパスする必要がある。おかげで風俗店で病気を貰うことはない。また、一日6時間以上の労働が必須となる。日曜日に働きたくなければ毎日7時間働く必要だ。しかも、仕事のほとんどが肉体労働である。月面での掘削作業は基地外で行うものと基地内で行うものがあり、これはもうウンザリする位にしんどいのである。四六時中呼吸困難な状態で、6時間穴掘りをしつづけるので非常に忍耐力を求められる。私なら耐え切らないのでさっさと地球に帰りたくなるだろうが、3年は帰らないという念書に判を押さなければ月には来られないので残念ながらそれも不可能である。

あなたがもし、ペンより重いものなんか持ったことない弱虫にもかかわらず風俗天国への憧れを忘れられないならなにわエネルギー工業の月開発部の試験を受けてみればいいでしょう。非常に狭き門なので一生懸命勉強してください。

ナニワ風俗潜入レポート（前書き）

ちゃんと風俗潜入レポートっぽくしてみました。まだ18歳以下でも見られるようになってると思うんですけど、どうなのでしょう？マズイと思ったらご一報ください。18歳以下でも見られるようにあんまり具体的な内容は書かないようにしました。次からは風俗情報誌から逸脱していくと思います。

ナニワ風俗潜入レポート

月面基地ナニワの風俗はその成り立ちのせいで少し特殊だ。ほとんどが一杯引つ掛けて一発抜く地球の風俗と同じタイプだが、一部の店は地球の風俗とは随分異なる。

今日は月面基地ナニワの代表的風俗店「おかえりなさい」に潜入してみた。出入り口はケバケバしい電飾はされていない。店内に入るとそこは普通のマンションのロビーのようだ。管理人のような風貌をしたおっさんが暇そうに窓口に座っているのに気付いた。

「おかえりなさい。そこに鍵あるからさっさと家に帰ってやりなよ」とおっさんは声をかけてきた。窓口の隣りに写真のプレートがあり、それぞれに部屋の鍵がついている。

エレベーターにのり指定の部屋に向かう。部屋までの廊下やエレベーターなども一般的なマンションとほぼ変わらない。廊下の壁の片側は巨大液晶パネルがはめ込まれていてそこには公園と夕方の公園が映し出されておりまるで地球に居るかのような錯覚を起こす。そうして歩いていくと指定の部屋に着いた。

部屋に入ると嬢の出向かいはない。部屋の奥から「おかえりなさい」と言う声が聞こえてくるだけである。

「ご飯は食べてきたの？」

と聞かれる。そう言われてみると昨日、月に着いて支給品のカロリーメイツっぽい宇宙食を食ってから何も口にしてなかったので腹が減っていた。

「いや、喰ってないよ」

思いのほかすんなりと旦那風の返事が出来たのでびっくりした。リビングにある席に着くと

「もう、遅くなりそうな時は電話してって言ってるでしょう。今日はどれぐらい居られるの？」

と彼女は料理をテーブルに置きながら怒っている。「おかえりなさ

「は電話予約が可能で予約を入れるといろいろなサービスを追加できるのでそのことを言っているのだろう。」「2時間ぐらいで行かなきゃいけないんだ」と答える。遊び心がうれしい。

晩御飯はカレーライス。どんな褒め上手の料理評論家でもレトルトカレーですねとしか評価しようがない味だ。これを食べ終わるとプレイに入ってしまうなと思い、ゆっくり味わってカレーを食べつつ質問を考えていると

「お隣の川口さんの旦那さん、穴掘りしてるらしいんだけどなんか変なものが出てきたんだって」

と向こうから世間話をはじめ。説明しておく穴掘りとは月ではよくある肉体労働でヘリウムスリーやチタンなどの鉱物を掘削する末端の作業員のことである。

「何か変なもんでも見つかったのかい？」

興味もあつたし、夫婦の演技を壊さないで仕事の内容について聞くのは難しいのでそのまま世間話を聞くことにした。

「それが何かの遺跡らしいのよ。」

眉唾である。興味も失せたのでプレイに移ることにした。

プレイ内容は非常に一般的で、お風呂に一緒に入り、体を洗ってもらい、愚息を口に含んでもらったりローションでぬるぬるになったり、シックスナインしてみたり。なかなかテクニシャンでした。地球から月にくるまで身体検査や移動で2週間も溜まっていたためか、重力が少ないのが関係しているのかはわからないが愚息はすぐに昇天してしまった。随分と時間が余ってしまったのでインタビューをしてみることにした。

「実は俺は潜入ライターなんですけどインタビューしてもいいですか？」

と聞くと快く引き受けてくれた。

21歳で月に来て今年で3年目の23歳、あと数ヶ月で地球に帰るそうだ。

「なんで月で働こうと思ったの？」

と聞くと彼女は少し悲しそうな顔をした。あまり仔細を聞くと泣かしてしまいかもしれないと思いそれ以上は聞くまいと思い、すぐに別の質問を考えたが、彼女は先の質問に答えてくれた。

普通に高校を卒業し、大学に入って普通の女の子として教育学部で勉強をしていたそうである。大学2年の時に両親が事故で他界、両親に自宅のローン以外に借金はなかったものの学費と実家のローン返済のために風俗店で働くことにしたのだと言う。大学は休学中になっており卒業したら教師になりたいそうだ。月に来たのは学校の先生になった時に風俗嬢をしていたのがバレにくいからとなかなかのしつかり者である。

「それよりさっきの話の続き聞いてくださいよ」

と彼女のほうから質問を促してきた。月面に遺跡があるという話だ。どう考えても眉唾すぎるのでスルーしたかったのだがこういわれると聞かないわけには行かない。これでもわたくし、いっぱしのジャーナリストなのだ。

「ホントの話なの？」

まるで少女のように目を輝かせて彼女は話し始めた。

月面基地には多数の掘削場がある。掘削と言っても実際には月表面にしかヘリウムスリーは存在しないらしく表面部分の土砂をブルドーザーでかき集めて集積場へと移送する。土砂集積の作業員と土砂を加熱炉で処理する作業員が月の住人の多くを占めている。彼女が話を聞いたのは土砂集積作業員7名、彼らは全員同じ作業所で働いていて別々の日に作業していたそうだ。

あまりに風俗情報から話がかき離れてしまったし、彼女の話も尽きるめどが全然立たないので別の話に変えようと思い

「やっぱりお客さんは土木作業員とか肉体労働の人が多い？」

と別の質問を試みたが、考えてみればほとんどの住人が肉体労働者なのだから聞くまでもない話だった。そろそろ帰ろうと、服を着てカバンを手に取ると

「今日、お給料日ですよ。」

といきなり夫婦芝居に引き戻された。同時に風俗店に居ると言う事実にも引き戻されたが金を支払い部屋を出た。

「いつてらっしゃい。」

彼女のいつてらっしゃいを背に部屋から出て少し思った。私は月に来てまだ2日目、2年3年と家族から離れて生活していると、嫁が自分の娘のような年齢でも擬似家族のようなことをしてでも家族の温もりを思い出したいと思うのかもしれない。

月の遺跡の場所（前書き）

すごく地味な第3話（；、旦那）しかもどう言っわけか次回引きで
自分でもビツクリシマシタ

月の遺跡の場所

月の住人の間では捕獲説が語られている。

いろいろと解説を飛ばした一文なので申し訳ない。月の起源についての話である。月の起源は親子説、双子説、ジャイアントインパクト説、そして捕獲説など学者の間でも様々な説が述べられているが、ジャイアントインパクト説がもっともリアリティーをもって語られている。しかし、月面に住む者の間では捕獲説がもっとも強く唱えられている。

私がナニワに来たのは潜入レポートを書いてくれとなにわエネルギー工業の広報担当者や雑誌編集者に頼まれてのことだった。しかし、それよりもゴシップとして売り込むのなら絶好のネタを前回の潜入レポートで風俗嬢に気になる情報を貰った。

月面には遺跡がある。

普通に考えれば馬鹿馬鹿しい情報だが、風俗ルポだけでは月面旅行の旅費と風俗の費用、滞在費で稼ぎがあまりにも寂しいことを考えると、この情報は裏を取っておいても損は無い。裏取りのために別の風俗店に行ってみたかったが、そんなに連射できるタイプの人間ではないのでキャバクラに行くことにした。意外にもキャバ嬢も同様の話をしてくれた、というよりも、店にいた2時間、すべてのキャバ嬢が興奮気味に遺跡の話をする。しかも私がルポライターであることは隠していたのにだ。最終的には周りの席のおっさんまで話し掛けてくる始末で、店内が月面遺跡や月面人がどのような姿をしていたとかいう学会のような状態である。風俗レポートとしては使い物にならなくなってしまうが、気になる情報もいくつか手に

入ったのでよしとしよう。なんにせよ、今、月での話題は遺跡で持ちきりである。

次の日、取り合えず風俗嬢に電話して遺跡情報を教えた客の名前を教えてもらい詳しい話を聞くことにした。連絡を取れたT氏は匿名を条件に情報を教えてくれた。月で遺跡の話を聞くと例外なく、話し手は興奮し取り留めなくいろいろな情報を吐き出すのでインタビュー形式で話を聞くことにした。

それでも、彼は3時間、自分の仕事が始まる直前まで取り留めなく話した。得られた情報で推測でないもの、正確と思われるものは遺跡の位置や発見した日時、発見した時の作業員仲間の名前程度で、その他の情報は宇宙人が作った地球侵略用の基地だとか月は宇宙人が作ったものだとか非常にうさんくさいものだった。

その日のうちにT氏の情報の裏を取るためになにわエネルギー工業に行き、当日の作業員名簿を見せてもらった。作業員は18名。T氏と同様の時間を費やさないように18名全員に電話で遺跡の位置と発見した日時について聞いたが彼の情報は確かなものであるらしい。

県や会社の対応はなんだろうか？言うまでもなく世紀の大発見だ、未知の文明はもちろん、ひよつとしたら未知の生命との接触さえあり得る。にもかかわらず県も会社も遺跡には知らん振り。私が終始遺跡をうさんくさいと思っていたのもそのせいだ。隠そうとしているのだろうか。何のために？嫌な予感がする。遺跡で何か不味いことでもあつて隠そうとしているんだ、なぜかそう思った。

遺跡のある場所は資源掘削区「A-07」、基地の外の遠方にあるため宇宙服と車が必要となる。基地外に出るためにはフォンブラウン県の許可が必要である。県や会社が遺跡を隠そうとしているなら許可は得られない。それどころか向こうが本気なら私の資料もすべて没収することだって可能だろう。私的にジャーナリズムより商売優先なので遺跡に関する調査は中断すべきだろう。

本業を堅実にこなして、遺跡の記事は地球に帰ってからどこか

適当な出版社に売り込むことにした。二束三文のトンデモネタ扱いだろうがそれでも金にならないよりはましだ。

次の面白そうな風俗店を探そうと街を歩いているとケータイがなった。出たくない。くそが。見たことのない番号だ。やつちまった。なにわエネルギー工業に名簿を取りに行ったのはミスだった。などなど悪態やら後悔やらが頭の中をグルグル回っている。

電話に出るとかけてきたのは遺跡発見現場の当日の責任者を名乗る男だった。調査は中止にしたのだと言ったが話だけでも聞いてくれと言つてきかない。県の陰謀説は杞憂なのかもしれないし、少なくともこの電話はその手の電話でないわけだから大丈夫だと判断し話を聞いてみることにした。山岡と名乗るその男はほかの月住人とは異なりいたって冷静だった。部下に教えられて私に興味を持ったらしい。興味深い話を聞かせてもらえそうなので喫茶店で会おうと頼むと快く受け入れてくれた。

予定の喫茶店に入ると山岡氏はすでに私を待っていた。年の頃は20代後半、現場監督とは思えないほど色白でしかもスーツ姿、いかにもエリートといった風貌だった。日光に直接当たることがないためなのだと彼は笑った。コーヒーを飲みながら彼の話を一通り聞いた。電話の印象のとおり、彼は冷静かつ正確に月面基地の位置、発掘の程度などを教えてくれたが、一方で特に目新しい情報はなかった。その後現場がどうなったかを知らないか聞いてみた。すると山岡氏は

「見に行けるように会社に話ときましようか？」

こう言った。理解するのに少し時間がかかったがどうやら聞き間違いじゃなく彼は見に行くことができると言つようなことを言った。私の推測では会社は遺跡を隠そうとしているはずだったが考えてみれば何の根拠もないものだし、そうできるのならそうしたい。おっさんや風俗嬢を推測ばかりだとかなんとか嘲笑していた自分が急に恥ずかしくなってきた。是非お願いしますと山岡さんに頼み、「ここは私が」というベタなマナーをこなして帰路に着いた。

次の日、連絡してきた時、山岡さんは話を通すどころかほとんどすべての準備をしてくれていた。基地外活動の許可、船外活動用の宇宙服、移動用のバギー（自動車とは言わないそうだ）、その他諸々。普通に考えれば異常だ。あまりにトントン拍子過ぎて猜疑心が頭をもたげたが、指定の場所に行ってみるとその事情は解明した。「こちらは、県の観光事業課の内橋さん。それから、こちらがナニワの広報課の為近さんです。で、こいつが今回運転手をしてもらう部下の土田です。」

私を入れて5人。山岡さんと土田さん以外は初対面だったの名刺交換をしながら、やっぱり陰謀とかではなかったのかと安心し、なぜか少し落胆した。じゃあ行きますかと言うと山岡さんはAゲートに向かった。

AゲートとはA地区への月と基地の門で、数百人の掘削作業員やブルドーザーが出入りするための気圧室を持つ巨大ゲートである。Aゲートは日に2回しか開かないため作業員達と一緒に出ることになる。初めての宇宙服だったので大いに手間取って恥ずかしい思いをするだろうなと思ったが、内橋さんや為近さんもどうやら初宇宙服だったらしく、何だ兄ちゃんたち初仕事か？などとおっさんに茶化された。

土田さんに着いていくと、月面に出た。満天の空に恐ろしいほどの黒と蒼そして無限を思わせる小さな光たち。日光が当たっていないためゲートのライトが当たらない所は大地まで漆黒だ。ここはまだ人間の土地ではない。私はこんなに暗い大地を知らない。なぜ月面の住人達があんなに月面遺跡の噂話をしたがるのか分かったような気がした。

バギーはすでに用意されていて山岡さんはすでに助手席に乗っていた。キャタピラを履いた軽トラックと言った外見のバギーのどこに乗るのかと思ったが予想通り荷台に乗せられた。宇宙服での動作は非常にむづかしく年取ったらこんな感じなのかなあと取り止めのないことを思った。

重くて動きづらい宇宙服だがバギーに着席すると少し息苦しいもののかなり楽だ。無線で話せるため、いろいろと聞きながら遺跡に着くのを待った。

一番に聞きたいことは、なぜ遺跡調査を大々的に行わないのかと言う質問だ。内橋氏によると、すでに調査済みで県内に考古学の専門家が一人も居なかったため、県外にデータを送付し今検討してもらっている所なのだそうである。なら県外から学者を連れてくればすむ様な気がするのだがと聞き返すと、月の人口は一定量に統制していないとすぐにパンクしてしまうから一度往還船が来てしまうと一ヶ月間は新しく人間を入れるわけには行かないのだと言う。なんとで前回、風俗レポーターを許可したんですかと聞くとそれはなにわさんの枠だから、と言われた。なにやら取ってつけたような理由だが、あんまり攻め過ぎると答えてもらえなくなってしまうかもしれないのでここら辺で止めようと思った。

「今回はね、あの遺跡を是非とも観光名所にしてもらいたいと思ってるんですよ。その件で為近さんに尋ねてみてただけでしょう？ いい人がいるって言うんで紹介してもらった次第なんです。」

特に何も尋ねていないのに勝手に内橋さんが説明してくれた。かなり口の軽い人らしい。私が月に来たのはなにわエネルギー工業の依頼なのだから知られて当然だ。

「風俗ライターなんでしょ？ 羨ましいなあ。やっぱり一晩で何軒もハシゴとかするんですか？」

と聞いてきたのは為近さんだった。どこかお勧めがないか聞いてみると「おかえりなさい」を薦められた。

風俗談義で盛り上がっているとバギーは遺跡に到着した。

月の遺跡の場所（後書き）

【つづく】

ナニワ遺跡探査の始まり

ナニワ遺跡はクレーターの中にあつた。クレーターの内側に月と同じ色をした卵円形のドームがあり、そのドームの一部に穴があいて遺跡は露出していた。ドームの内部はよく見えなかったがドーム自体を見た感じでは「これは明らかに人工物である」そう思った。

それ以上に興奮と恐怖の緋い交ぜになつたような奇妙な感情が沸き起こつていた。非人工の人工物がこれほど本能を呼び起こすと言うのは意外だったが、当然のようにも思えた。とりあえずバギーを降り「じゃあ行きますか」と皆に声をかけたが5人中3人が体調不良を訴えた。純粹に恐かつたんだと思う。私と広報部の為近さんの二人で遺跡内に入るになつた。為近さんは4人の中で一番下役なのだろうか。私物のカメラは真空条件に対応していないかもしれないと言うことで、県支給のデジタルビデオカメラとハンドライトを持ち二人でドームの入り口に向かう。

漆黒の闇にぽっかりと口をあけた灰色のドーム。これは未だかつて我々ではなく、おそらくこれから我々のものではないだろう。「じゃあ、入りましょうか」

そう言つた為近さんの声は震えていた。重いスーツのせいなのか、何かによつて引き起こされている恐怖感のせいなのかはわからないが二人の足取りは重くゆつくりと遺跡の入り口へと向かつた。

入り口と言うには少しいびつな形をしているそれは入り口ではなくおそらく傷跡と言つた方がいいものだった。穴があいてしまったのは月軌道上で廃棄されたゴミの落下のせいらしく、穴の近辺にはゴミが散乱していた。為近さんは私に先に入るように薦めながら会釈した。

遺跡内部は想像した以上に広くそして明るかつた。明るかつたと言つと語弊があるかもしれないから言い換えると真つ暗ではなく薄暗い灰色の闇が広がつていた。外部から見たドームは月の地面と同

じ色をしていて、そのせいでデブリによって事故がおきるまで外観からは発見はふかのうであった。そこから考えればドーム外壁は光を通さないのだから中は暗闇のはずである。が、薄暗い。なにやら畏れつつカメラを回しつつ周囲を確認してみると、何もなかった。まっ平らな地面に違和感を感じたが一人でドーム内に居るのが嫌だったので

「何も無いですよ」

と為近さんに言うと、スーツの調子が悪いのだとかぶつぶつ言い訳をしながら彼は恐る恐るドームの中に入ってきた。企業の社員で危険なことからは離れて暮らしてきた彼の一方で、私の中ではなにやらジャーナリスト精神のようなものがムクムクと沸き起こってくる気がしていた。

「もう少し奥まで行ってみましょうか」

そう言うのと彼は渋々承諾した。極秘任務を成果無しで帰ればそれはそれで不味いのだろう。

ドームの中心に向かってほんの５メートルほど歩くと段差があらわれた。一メートル無いぐらいだが低くなっている。嫌がる為近さんを説得して段差を降りるとまた平たい地面が続いているようだった。段差はドームの内側にずっと続いているようでありおそらく同心円状に囲っているように思われた。

「整備されてる……」

声に出したのは為近さんだった。私もそう思っていたし、始めからわかっていたことなのになぜだかぞつとした。恐怖なのか気分の高揚なのか区別がつかなかったが身の毛がよだった。

「これは明らかにそうですね。ひょっとすると道路なのかも知れないな」

声を出さなければドームに飲み込まれそうな気がして意味の無いことをつぶやいてしまう。二人で呆然とドームの内側を眺めて立っていると、ふと静か過ぎる気がした。

「外の３人聞こえますか？」

返事が無い。まるで漫画のように二人は顔を合わせて全速後退した。着慣れないスーツで1メートル程度の段差に足を取られながら入り口に猛ダッシュして入り口に戻った。すると

「もしもし、為近さん」

と応答を求める声が聞こえた。どうやらドームは電波を遮断する性質を持つらしい。入り口近辺では普通に通話が可能だった。

ドームを隔てると無線は使えないようなので、入り口まで車を突っ込んでそこをベースキャンプにしてしまう案を採用して、再度内部探査に出陣することになった。今日は一度フォンブラウンに戻って後日と言う為近さんの案は即時却下された。再度探査のメンバーは私と為近さんの二人で決まったが、為近さんはそれほど嫌がることなく単にうなだれて諦めている様だった。

私達二人はまたドームに入っていた。入り口はバギーの強力なライトで照らされていて、足元に自分達の足跡が残るほど埃が溜まっていることに気がついた。残された足跡は往復合わせて4本の道筋が残されている。足跡をたどり段差を降りてさっき来たところまで再び帰ると

「内橋さん聞こえてますね」

と為近さんは怒気を含んだ声で通信状況を確認した。大丈夫ですよと言う声が聞こえ、振り返ると誰かが手を振っているのが見えた。いきますよ、と声をかけてビデオとライトを両手に持って中心に向かって歩き始めた。

ナニワ遺跡探査の始まり（後書き）

某下瀬さんがやたら書くのが遅いのでいつも腹を立てている私ですが、彼の気持ちが痛いほどわかるぐらい遅れてしまいました。期間があいてしまうとこういう風に話が来てたか忘れてしまうので四苦八苦してしまいました。ホントに申し訳ないです。

ナニワ遺跡の深部（前書き）

また延長で申し訳ないです。てか章分けとかがこんなに難しいもの
だとは思ってなかった。際限なく分かれてしまつて困る。

ナニワ遺跡の深部

ナニワ遺跡は卵円形のドームである。そしてそのドームに開いてしまった穴から私達はかれこれ一時間近く中心部に向かって歩いていった。もはや外壁の穴から照らしているライトは全く見えなくなってしまった。ドーム内は約10メートル毎に段差があり中心に向かって一メートルほど低くなっていて、12段目を降りて10メートル歩いても段差が無いのでどうやらあれが最後の段差だったらしいと、ベースキャンプに通信したのが10分前、宇宙服で歩きにくいせいなのか、得体の知れない恐怖感のせいなのか、足取りはやたら重かった。周囲を警戒したりビデオを振り回す元気は無く先を歩く為近さんもライトはただ足元を照らすのみで二人は警戒心無くただ歩いていた。

急に為近さんが足を止めた。つられて足を止める。顔を上げて彼を見ると宇宙服が震えている野に気付いた。どうしましたあと尋ねると、被る感じで彼は口を開いた。

「いいいい、いつから足跡三つでした」

足元を眺めると私の足跡、為近さんの足跡のほかにもう一つ足跡が伸びている。疲れすぎていて何も考えられない。かといって走って逃げる気力も湧かず、とりあえず外壁のメンバーに連絡を取る。

「先に誰が入った可能性もありますから足跡の形をよく確認してみてください」

とベースキャンプの誰かが答えた。なるほど、そう言われてみればそうだ。よく観察してみると我々のブーツの足跡と同一であるように思えた。

「多分第一発見者の足跡だと思います。エアーの量もまだ十分にありますし調査を継続してください。」

見た感じ為近さんは限界をとくに超えているようだったが、了解という声が響いた。

為近さんは足跡を追いつつ私の先を歩いている。しばらく頭が働かない状態でついていったが夢から覚めるように徐々に違和感が湧いてきた。足跡が三つ。三つ？奇数個はおかしい。第一発見者は戻らなかったのか？いや、別のルートを通った可能性もある。しかも第一発見者が遺跡の中にはいったなんて話は聞いてなかった。空回りしがちな頭でしばらく考えて通信を為近さんだけに限定したチャンネルに変え、こう聞いてみた。

「第一発見者つてのはどうなったんですか」

為近さんはしばらく黙り、こう言った。

「どうなったんでしょうね…」

思わず立ち止まった。第一発見者はどうなったのか。もう一度聞きたかった。一方でなにかが頭の中で聞くなと激しく警告する。教えてもらえた所でどうなる。調査を終了して戻っていいってことになるのか？さっきのベースキャンプの頭ごなしな雰囲気を考えればそうならない。どうしたらいい。どうできる。頭が空転している。

すると、為近さんはチャンネルを私限定に変え教えてくれた…。

まだ戻っていない。だから、と彼は続けた。何かあればすぐに逃げ出しましょう。ベースまで走って戻って、助かりましょうと。

薄暗い灰色の中を重い体で歩いているのは粘土の中を泳いでいるように体力を消耗する。もっとも、粘土の中を泳いだことが無いから何とも言えないが、疲れるのは事実だ。身体的な疲労もそうだが、自分が使い捨てられるかもしれないという疑心から来る精神的疲労は半端なものではない。声を出さないと、となんとなく思った。

「第一発見者は為近さんの知ってる人なんですか？」

長い沈黙。いや、それほど長くは無かったのかもしれない。回線を2人限定のものにし、小さな声で帰ってないとだけ呟いた。

無言で歩いていると為近さんが立ち止まった。第一発見者の足跡の先を指差している。目をやってみると足跡はそこで途切れ居ていた。何も無い平らな埃の中で、まさにぶつとりと途切れていた。にもかかわらず、その周囲には途切れた足跡を覗いて何の痕跡も残さ

れていない。足跡の主さえそこには居なかった。

打ち切り（前書き）

打ち切りです（；、ん）自分で

打ち切り

足跡を調べてみようかと近づいてみるとそこは全くの別世界だった。夢を見ているのだという認識が頭の中に降りてきたが、宇宙服を着ている為近さんが目に入ってより混乱した。そうだ。私は今、前人未踏の遺跡の内部を探索しているのだ。

人類以外の何かが作り上げた文明と言うにはあまりにも人工的な世界が広がっていた。そして同時に激しい既視感にも襲われた。ちかちかと光るピンク色のネオン、投げ捨てられた屑や吐きっぱなしの吐瀉物。そこは紛れもなく歓楽街の通りに見えた。月で二つ目の歓楽街に私と為近さんは立っていた。

自分の視界に確信が持てず、かといってなんと声をかけていいものかわからなかったのだから為近さんに声をかけられなかった。二人でただ立ち尽くして誰も居ない街を眺めていた。

「ここは人間の街ですよね」

とさきに声を出したのは為近さんだった。

読んでくれてた人ごめんなさい（； 旦、）

遺跡にきたらなんか風俗街が有って風俗ライターの本領発揮だぜイ
エイ！って感じで続けようと思ってたんだけど忙しくなってしまう
て一年ほど更新出来なさそうなのでここで終わりにします。ゝ（
ー、）ノ読んでくれてありがとうございました

打ち切り（後書き）

勝手にはじめて勝手に打ち切るなんて最低人間です（；；）
めんなさい

一年後に更新したいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912d/>

月面基地ナニワ

2010年10月10日15時35分発行